



全国棚田(千枚田)連絡協議会

棚田ライタラス

特別号 2013.7.20
(別冊:和歌山県の棚田 段々畑)

企画制作: 和歌山県農業農村整備課
〒640-8585 和歌山市小松原通1-1
TEL: 073-441-2951 FAX: 073-425-0287
<http://www.pref.wakayama.lg.jp>
発行: 全国棚田(千枚田)連絡協議会
<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>
編集: ふるきゃらネットワーク

別冊 和歌山県の棚田 段々畑



有田川町賢地区のみかん畑(有田川町提供)



「棚田」地名の発祥地・紀州と紀州みかんが生んだ段々畑／国の重要文化的景観の棚田——蘭島／ミツバチと共に生きる紀州の段々畑ほか

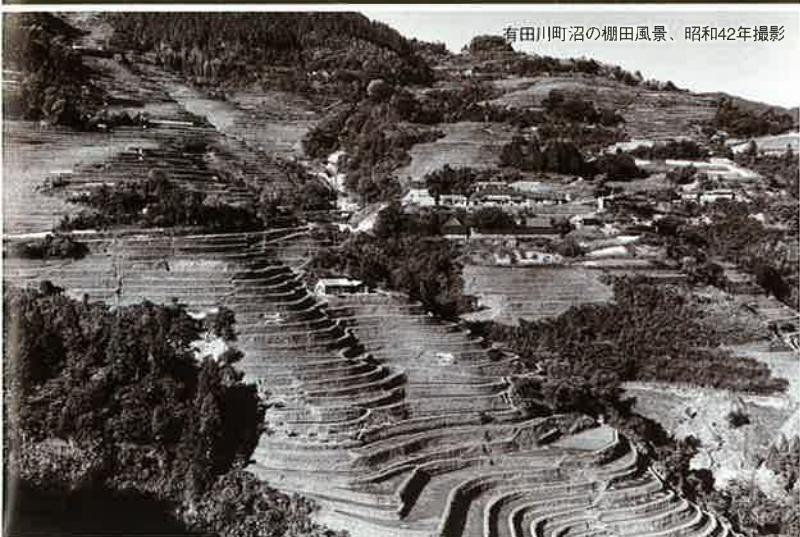
紀州の大地に 刻まれた 美雄大なる



朝霧の棚田(田辺市秋津川)

有田川町沼の棚田風景、昭和42年撮影

大正時期の有田市のみかん畑風景



紀州の陰い山々は連なり、川を育み、遙か高みから海を望む。その雄大なる地形に沿つて人々は、營々と棚田を拓き段々畑を築き、いのちを今日へとつないでいた。

有田川沿岸に広がるみかん畑、川の蛇行が生んだ稀有な形のあらぎ島、太平洋に面した離壇を思わせる御坊の石垣、南紀の山にぽつかりと拓かれた小阪の棚田……。

今を生きる私たちは、先人が造り上げた、これら段々の風景を前に「美しい」と足を止める。それは、棚田や段々畑には百年千年の時が刻まれ、その時間の豊かさを感じることができるからだ。水利の工夫、石積みの技……時代時代の知恵と財、最大限の労力が投じられ積み重なつていて。

そして今も日々、そこで米を作り、果樹を育てる人がいる。草は刈られ、石積みは整えられる。だから美しい。

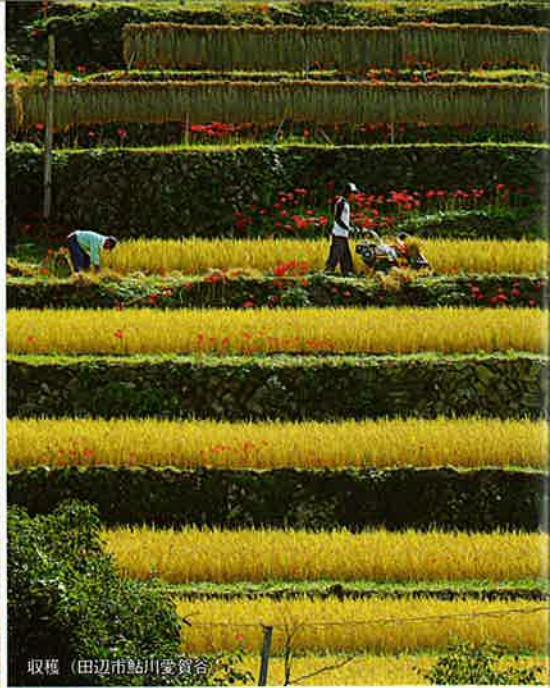
だが、大地に刻まれた美はあまりにたやすく崩れてゆく。今、山から人は減り、農から人が離れ、棚田や段々畑の耕作にまで手が回らない。山の田畑が荒れれば、土砂崩壊や洪水を食い止めれる力も衰える。先人の叡知も後世へ残せず、美しい、私たちの原点が消えゆく。私たちは岐路に立っている。

紀州の懷には棚田・段々畑が数多く在る。ここで人々は生き抜いてきた。そして田を拓き、山に石を積んだ。この地で皆が生きていけるよう、この地が豊かになるよう人々は願い、山の斜面に這うように働いた。

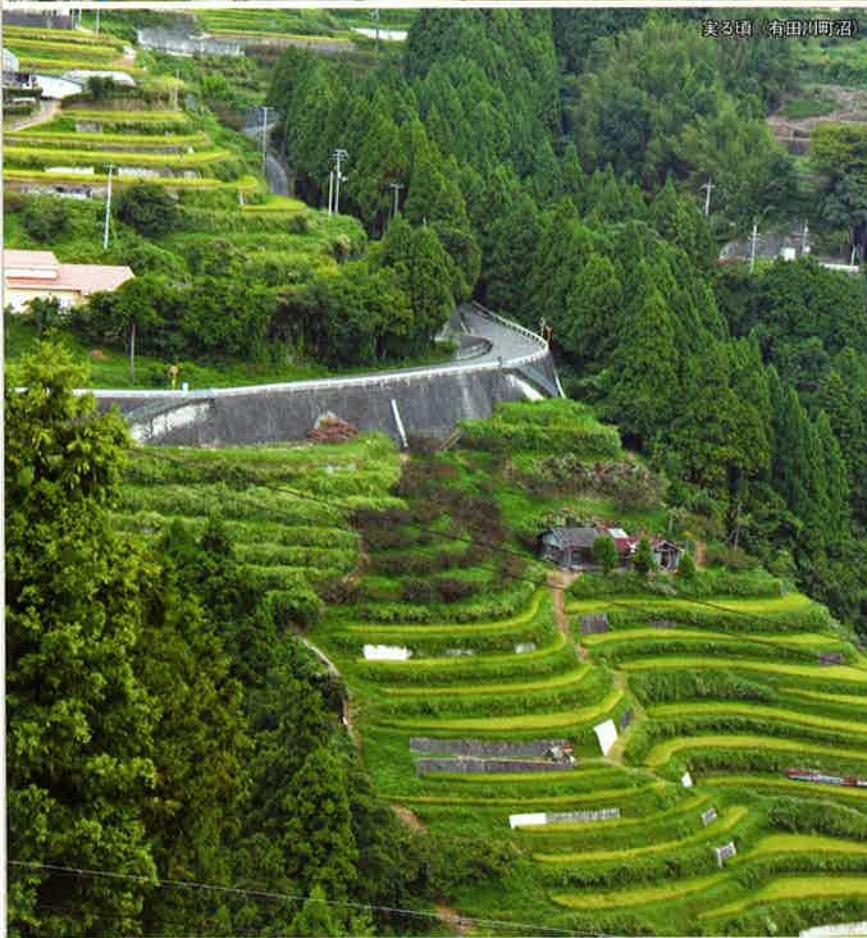
すべては、今へと続くいのちのためだった。だからこそ、これらの風景が私たちの心を打つのである。



有田市展望（有田市山田農）



収穫（田辺市鶴川堂鏡谷）



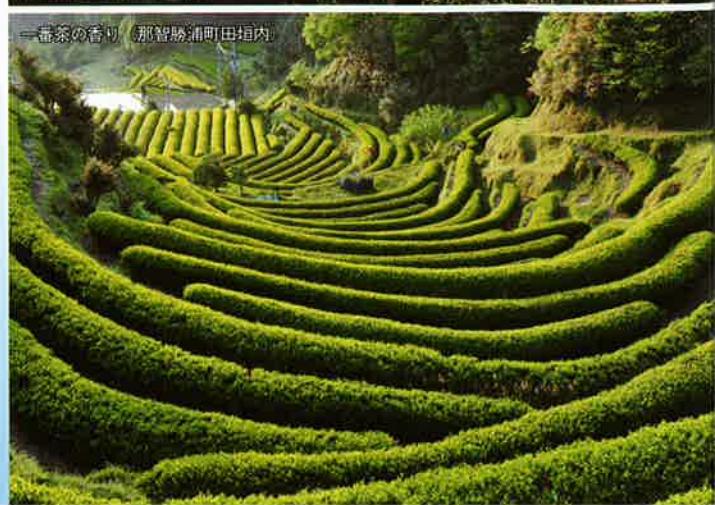
実る頃（有田川町沼）



三尾川の棚田（紀美野町三尾川）



早秋の棚田（海南市笠畑）



一番茶の香り（那智勝浦町田舎内）

・発行にあたって・

和歌山県では恵まれた気象条件の下、古くから傾斜地を活用した棚田・段々畑が拡がり、農業生産を支えてきました。しかし近年、農家の高齢化や担い手不足など農業を取り巻く環境は厳しさを増しています。

棚田・段々畑が保有する農業生産性に加えて、良好な景観をはじめとする多面的機能を認識し、将来にわたりこれらの農地を守っていく取り組みの活性化を期待するとともに、全国の皆さんに『和歌山県の棚田・段々畑』を知っていただくことを目的に、このたび全国棚田(千枚田)連絡協議会機関誌『ライステラス』の別冊号を発行させていただきます。(和歌山県)

目 次

- p2: グラビア・紀州の大地に刻まれた雄大なる美
- p4: 「棚田」地名の発祥地・紀州と紀州みかんが生んだ段々畑
- p7: 国の重要文化的景観の棚田——瀬戸島(有田川町清水・あらざ島)
- p8: 棚田はムラの魅力を伝える発信拠点！(那智勝浦町色川)
- p9: 地元と都市住民が結成「富貴・簡香田んぼつくりタイ」(高野町富貴・簡香)
- 「棚田オーナー制度」に取り組み11年(海南市海老谷)
- p10: 「なんとかしようと、わがからてしまうら」(有田川町沼谷)
- 和歌山大学生と地元のコラボレーション(有田川町沼)
- p11: ミツバチと共に生きる紀州の段々畑
- p12: 紀州・段々畑の風景の奥にへ生きた地域遺産を見る～(御坊市名田／有田川町吉備)
- p14: 明日へ、段々畑を生かす—全国の取り組みから
(長崎県長与町木場／愛媛県宇和島市遊子水荷浦)
- p16: 和歌山県の地域元気情報

「棚田」地名の発祥地・紀州と紀州みかんが生んだ段々畑

～紀州における棚田・段々畑の歴史～

早稲田大学 准教授 高木 徳郎

棚田という言葉は紀州で生まれた

日本における棚田の歴史は古い。日本列島は、そもそも地形が複雑で平地が少ないことを特徴のひとつとしており、そうした中で増え続ける人口を支えるため、飛鳥・奈良時代にはすでに、条件不利な山間地にも水田が開発されていったと考えられている。

しかし、「棚田」という言葉の歴史は、それほど古いものではない。長い間、傾斜地に階段状に営まれた水田は、「棚田」ではなく、別の言葉で呼びならわされてきたということであろう。すなわち、

「山田」とか「迫田」という言葉がそれであろうと考えられている。そして、この「棚田」という言葉の発祥に、紀州の歴史が大きく関わっている。

棚田という言葉が文献の上で初めて使われたのは、南北朝時代の初め、現在の和歌山県かつらぎ町東渋田で高野山によって行われた耕地調査の記録の中においてであつた（渋田査定帳、高野山御影堂文書）。この地域は、平安時代後期の一〇世紀半ば以来、後に根来寺へと発展する高野山の大伝法院が支配する荘園でしたが、鎌倉時代最末期の一三三三（元弘

三）年、後醍醐天皇により、高野山金剛峯寺の荘園とすることが認められ、以後、高野山によって支配されていくこととなつた。高野山は、当時、南北朝の内乱が続く中ではあつたが、渋田荘を安定的に経営するため、その基盤となる耕地状況の厳密な調査を進め、一三三八（建武五年、その結果を記録した台帳（査定帳）を作成した。「棚田」という言葉は、その耕地台帳の中で、一反ほどの水田の所在地を示す地名として使われているのである。

さらに、それからほぼ七〇年を経た一四〇六（応永二十三）年、現在の同県紀の川市桃山町元にあつた水田について記さ

れた文書の中にも、カタカナ交じりで「タナ田」と記されている。紀の川市桃山町は、平安時代後期以来、一貫して高野山が支配した荒川荘という荘園があつた地域で、「タナ田」の文字が記された文書は、高野山で行われる法要の費用を捻出するための水田が、現地でどのようない状況になつているかということについて報告した、いわば「報告書」である。この「報告書」の一節に、次のようにだりがある。

一反 山崎 今ハタナ田ト云フ

（中略）一反坪ハ上ミニ池アリ、池ノ水ヲ引ク也、根本ハ糯田ト名ク、

今ハ山田ニテ棚ニ似タル故ニ、タナ

田ト云

つまり、山崎という小字の中に「タナ田」と呼ばれる一反の水田があり、その棚田の上には池があつて、棚田はその池の水で灌漑されているというのである。

さらに、その棚田は、もともとは糯米（もち米）を作る水田であり、今は山田であつて、棚に似ているために「棚田」と呼ばれるようになったと、その地名の由来を記している。水田の現況を報告する報告書の中で、单なる一筆の水田の呼称の由来を、ここまで執拗に書き止めるのはきわめて珍しい。そこで、ここに書かれているニュアンスを敢えて読み取る

かつらぎ町東渋田「棚田」地名初見地の現況

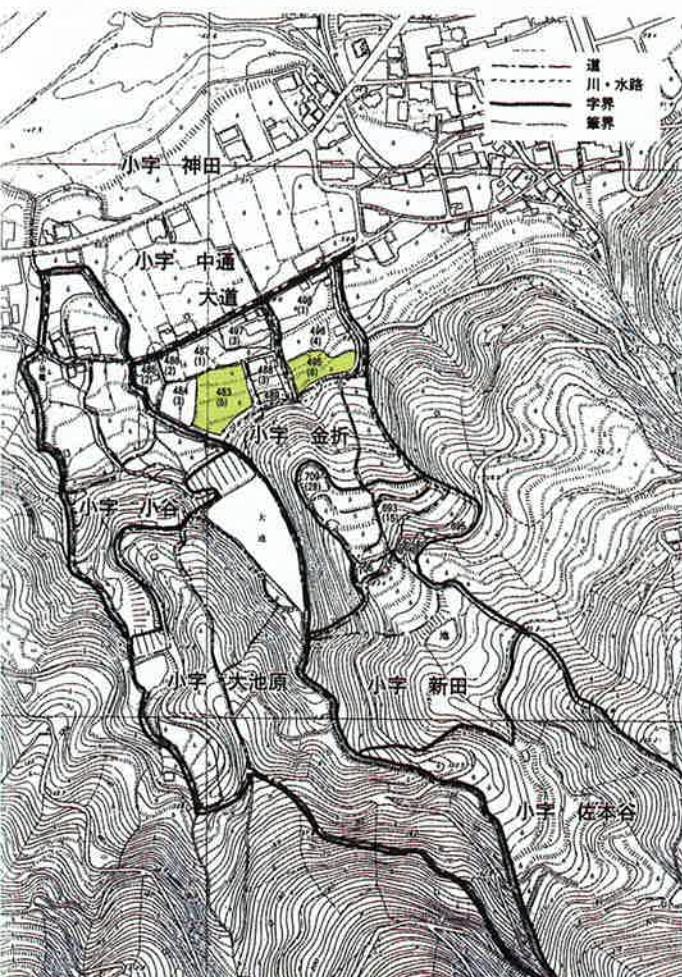


図1：棚田地名初見地の現地比定図

高木徳郎（たかぎ・とくろう）
1970年生まれ。2001年から2010年まで、和歌山県立博物館に学芸員として勤務。高野山・丹生都比売神社・熊野三山・根来寺などをテーマにした展覧会の開催にたずさわった後、2010年4月より現職。紀州をフィールドにした中世史の研究を続ける。棚田学会理事

すると、以下のようになるだろう。この水田はもともともち米を栽培する特別な水田であり、地名としては「棚田」と呼ばれていたが、最近になつて、もち米の栽培をやめたのか、その呼称が使われなくなり、棚に似ているので「棚田」と呼ぶようになった。おそらく、「棚田」という地名はこの時期ではあまりポピュラーな地名でなかつたのだろう。それに対して「山田」は比較的ポピュラーな地名だつたので、このような説明がなされているものと思われる。この報告書を書いた高野山の僧にとつては、「棚田」という言葉はおそらく初めて聞く言葉であり、現地の状況を見たり、あるいは地元の人間から聞き取りをする中で、これを記しているのであろう。この記述は、「棚田」という地名の出現期・発生期の状況を克明に物語つており、貴重な記述と言えるだろう。おそらく、「棚に似てるから棚田と呼ぶのだ」という発言は、状況から考へて、高野山の僧ではなく、地元の農民が発した言葉と考えられ、その意味では、「棚田」という言葉は、この史料をみる限り、紀州の農民たちが使い始めた言葉であつたと言えるのではないだろうか。

棚田地名発祥地の景観

これら古い文献にみえる棚田は、実際にどのような場所にあつたのだろうか。一三三八年の渋田荘の史料にみえる「棚田」を、現代の地形図の上に緑色で彩色し示してみたのが、図1の地図である。不思議なことに、そこには、現在私たちが



紀美野町中田の棚田



紀美野町梅本の棚田



龍王水

「棚田」と聞いてイメージするような棚田はない。せいぜい山の麓に三～四段の段に作つた耕地が広がる程度であり、それは渋田荘・荒川荘どちらの耕地にも共通している。つまり、「棚田」という言葉が生まれた南北朝・室町時代の人々にとっての「棚田」とは、現代の私たちがイメージするような、急傾斜地に何十段もの段を作つて造成するようなものではなく、山麓部分にせいぜい数段程度の段を作つた水田群を指す言葉であった可能性が高いのである。

しかし、これら文献上の古い「棚田」は、平地からそこを見上げるには十分な高さがあり、渋田荘の棚田の場合は、莊園内における最大の神社であり、住民たちの精神的なよりどころであつた蟻通神（アリノミコト）といふ。おそらく、「棚に似てるから棚田と呼ぶのだ」という発言は、状況から考へて、高野山の僧ではなく、地元の農民が発した言葉と考えられ、その意味では、「棚田」という言葉は、この史料をみる限り、紀州の農民たちが使い始めた言葉であつたと言えるのではないだろうか。

中世から現代に続く棚田

このように文献の上ではつきりと「棚田」と明記されずとも、様々な方法に

耕作されてはいるが、石積みの畦畔やそれを縫うように走る水路の痕跡を認めることができる（なお、荒川荘の史料にみえる「タナ田」は、近年敷設された県道のバイパスのために、残念ながら消滅してしまい、今その跡地を目にすることはできない）。

社へと至る莊園内最大のメインストリートに面していて、そこを通る人から常に見上げられる存在であつたことは間違いない。現在では北に県道が開通したためすつかり人通りは少なくなり、かつての「棚田」も柿などの果樹を栽培する畑に転作されてはいるが、石積みの畦畔やそれを縫うように走る水路の痕跡を認めることができる（なお、荒川荘の史料にみえる「タナ田」は、近年敷設された県道のバイパスのために、残念ながら消滅してしまい、今その跡地を目にすることはできない）。

棚田はすべて傾斜地に存在する「棚田の村」と言つても過言ではないが、中世の中田村・梅本村には一四五〇（応永二十五）年の時点で、一五町前後の水田が存在していたことを示す古文書があり、文献的に、確実にその開発が中世にまで遡る棚田として貴重な存在であると言える。これらの棚田の開発には、恒常的な用水路の存在が不可欠であつたと考えられるが、現地では、靈峰・生石ヶ峰の豊富な谷水を巧みに導水する「龍王水」と呼ばれる用水路が現在でも利用されており、これらを利用した灌漑が、中世以来、続けてきたことが窺える。

有田・下津の段々畑景観

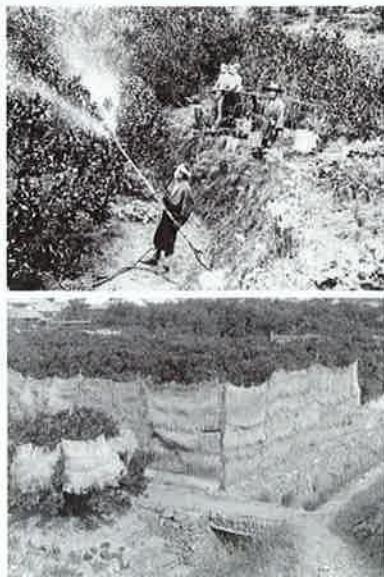
一方、段々畑の歴史はどうであろうか。和歌山県内では、有田・下津地方を中心とし、壮大なみかん栽培の段々畑が広がっている。紀州におけるみかんの栽培は、中世末期から江戸時代に入る頃に始まつたとされ、有田・下津地方にみられるみかん栽培の段々畑景観は、江戸時代に入つてから形成されたものであることが知られる。『紀伊国名所図会』には、中世最末期の天正年間に、肥後国八代よりもたらされた原木が、糸鹿(糸我)において移植され、「氣味甘美なれば」とのことと近郷の村々にも接ぎ木によつて広まつたことが記されている。

この当時のみかん栽培の様子は、一六〇一(慶長六)年の検地帳などから知られるが、金屋の釜中村で「(みかんの木)十六本内十三本ならず」というような有り様であった(『有田市誌』)。つまり、接ぎ木は『紀伊国名所図会』がいうほど簡単にいかなかつたようで、接ぎ木しても実がならない木も多かつたようである。同じ年、下津地方において行われた検地でも、例えば、百垣内村では「みかん乃木之事」として合計十四本のみかんの木が記録されているに過ぎない。しかし、その後、徳川頼宣の入国以降、品種改良や藩による保護・育成政策を経て、廻船を利用した江戸でのみかん販売が進められ、江戸時代末期には「天下最大の産物とはなりぬ」という状態となつて、紀州みかんの名が全国に広まつた。『紀伊国名所図会』に掲載された図のよう、壮大なみかんの段々畑の景観は、江戸時代後半頃までには成立したものなのである。

紀州の棚田や段々畑の景観は、その価値の高さにも関わらず、これまでそれほど注目を集めてきたわけではない。一九九九(平成一一)年に農林水産省が選定した「日本の棚田百選」に入選しているのも、和歌山県では二〇一三(平成二十五)年、全国棚田(千枚田)サミット開催地、有田川町の「あらぎ島」一ヶ所のみである。しかし、歴史的観点からすると、百選の棚田に劣らない価値を有する棚田は県内にもつとたくさんある。残念



図2:『紀伊国名所図会』にみえる有田地方のみかん畑



大正時代から昭和初期にかけての有田地方のみかん畑風景



有田川を下り河口へみかんを運ぶひらた舟。みかんの輸送は、江戸時代から大正13年に鉄道が開通するまで有田川が大動脈だった(写真提供:和歌山県)

ながら、その価値を評価する仕組みがない中で、耕作放棄が進む棚田・段々畑も少なくない。全国棚田サミットをきっかけに、そうした今まで光の当たらなかつた県内の多くの棚田・段々畑の文化的・歴史的価値を含めた価値の見直しが進むことを願つてやまない。

国の重要な文化的景観の棚田——蘭島

あらぎじま

有田川町教育委員会社会教育部
学芸員(主任) 川口 修実

あらぎ島が国の重要文化的景観に！

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」主要資産の一つである高野山。高野山に水源をもつ有田川の上流部にあらぎ島は位置しています。平成25年6月21日、あらぎ島と周囲の景観が、「蘭島及び三田・清水の農山村景観」として国の重要文化的景観に選定するよう答申されました。

「蘭島をはじめとする有田川上流域の河岸段丘地形において展開する水田耕作や和紙生産等の特徴的な生産活動によって生み出された景観地が、この地域の生活・生業を理解する上で欠くことのできないもの」として高い評価を得たことによります。

あらぎ島を中心とした景観の価値

① 全国的にも希有な地形と棚田景観

あらぎ島とは、有田川の蛇行と浸食作用によって形成された舌状の河岸段丘地形の呼称ですが、このような対称的な地形はたいへん珍しいものです。さらに江戸時代の新田開発により全国的にも希有な棚田景観が生み出され、審美的な価値も高く評価されています。また、多様な生態系が維持されていることも、景観の価値を高めています。

② 豊かな歴史背景がある

当地域の水田の開発は、長久3年(1042)の高野山文書にその名が見え、約千年前に遡ります。鎌倉時代には「ミヨキリ、ハナヲソギ…」といったたどりし片仮名書きで、地頭の暴力を莊



あらぎ島は全体面積：28668.97m²、水田面積：24102.71m²。重要文化的景観選定面積：110.7ha。地元では、平成8年から「あらぎ島景観保全保存会」が耕作者6名で結成され、活動中。ほか「左太夫の志」も平成25年に耕作者8名で結成

右写真は、現代へと伝えられる紙漉き作業



空から見たあらぎ島。北側より



上湯用水路

3km以上の水路を開き、あらぎ島をはじめとした新田開発や和紙生産を興しましたが、史料によつてその開発過程や年代が特定できる点も貴重です。

③ 伝統的な水利慣行や貯枡が残る

当地域では、古くから灌漑用水路は湯、水利組織は田人と呼ばれています。あらぎ島への用水路は「上湯」と呼ばれ、今も田人によって共同管理され、田越しの灌漑が残るなど伝統的な水利慣行が継承されています。また、さまざまな民俗行事や風習が色濃く残されており、これら無形の要素が景観を支えています。

④ 農村景観を楽しむ環境がある

非常に固定的な視点場をもつあらぎ島を中心とした景観は、あらぎ島が扇状のユニークな形をした小さな塊状の棚田景

観であるため、全体の棚田を認識し、記憶し、対象化できる景観であり、中山間の農村全体を一望できる、楽しみやすい環境があります。

重要文化的景観の選定を機に

あらぎ島や周囲の景観は、住民の皆さんには日常的であたり前の風景ですが、重要文化的景観の選定を機に、身近な風景が地域の風土や歴史を伝える貴重な文化遺産であることを再認識していただき、その価値を住民と行政が共有していくことがこの景観を次世代へ継承していく第一歩につながると考えています。重要な文化的景観の選定や全国棚田サミットの開催を契機に、持続可能な営農活動と地域活性化の実現へ向け、本格的な始動にしなければなりません。

あらぎ島の景観は単に美しいだけではありません。展望所から見下ろすその景観の中には、度重なる自然災害と向き合った、何千年にもわたり絶え間なく繰り返されてきた人々の営みが生み出した各時代の要素が見事に調和した姿がそこにはあります。

重要文化的景観の保護は、単なる棚田の姿を保全するのではなく、棚田と人々の生活が結びついた関係性を保全していくことです。あらぎ島の景観を通して、「棚田を保全する意味」を多くの人々に問い合わせし、知つていただくこと、それが可能な環境を有するあらぎ島の景観を保全する意義は、決して少なくないと考えます。



事務局の吉田さん（右）は和歌山市出身。原さん（左）は岡山県にルーツを持つ兵庫県明石市出身。色川の1ターン者受け入れ窓口の「色川地域振興推進委員会」（平成3年発足）会長でもある



松木代表が暮らす小阪
集落は26戸43人

平成23年の紀伊半島大水害の傷跡が今も生々しく残る南紀那智勝浦町。紀伊勝浦駅から車で約40分。山や川が、猛威を振るつた雨に耐えきれず、大規模に崩れた現場を目にしながら色川地区に入つていく。色川地区には9つの集落があるが、その一つ、小阪に着く。空に向かつて広がる棚田を中心に美しい集落が形成されている。棚田の真ん中を流れる谷川では、未だ災害復旧工事が続いていた。

「川よりこっち（北）はずっと耕作してきたけれど、向こう側（南）が30年やつてなかつた。それを平成17年に国の事業を活用して復元し、4反78枚になつた。昔のまんまの形よ」

復田した棚田を保全する「棚田を守ろう会」代表の松木繁明さんが教えてくれた。小阪に生まれ育ち、小阪の棚田を耕す。その一方で、前代表を務めた原和男さんは昭和56年、色川地区に入った1ターン者。実は、色川地区は和歌山県の移住推進地区であり、1ターン者が多い。きっかけは昭和52年に5人の新規就農定住者が入つたことだった。以来、地域で1ターン者の定住が推し進められ、行政も支援してきた。ちなみに色川地区215戸中70戸が1ターン者（平成25年）である。実に3分の1を占めている。

Iターン者を受け入れてきた色川地区

平成23年の紀伊半島大水害の傷跡が今も生々しく残る南紀那智勝浦町。紀伊勝浦駅から車で約40分。山や川が、猛威を振るつた雨に耐えきれず、大規模に崩れた現場を目にしながら色川地区に入つていく。色川地区には9つの集落があるが、その一つ、小阪に着く。空に向かつて広がる棚田を中心美しく集落が形成されている。棚田の真ん中を流れる谷川では、未だ災害復旧工事が続いていた。

「棚田を守ろう会」は平成17年、復田を機に発足。事務局の吉田創さんは話す。「今、おそらく100人ぐらいがかかるわっててくれていると思います。先日の田植え作業に参加したのは約60人。休耕田はまだまだたくさんありますから、一枚でも多く復活させて米づくりをやっていきたいですね。僕も平成15年に1ターンで来て、田んぼが荒れたままではもったいないと棚田を守ろう会に入りました」

守ろう会の正会員は地元を中心に16人。賛助会員40人（年1万円で新米5kgなどを選択）新設の「棚田応援団」はこれからだが、年10千円から。ボランティア作業員の「棚田守り隊」には10人が登録済みだ（平成25年5月現在）。

「1ターン者が入つて良かったね」とよく言われます。でも、それだけで地域が成り立つていくと不自然なんです。つまり、地元で育った人が残つていなければ意味します。ですから、地元で育つた子が残れるようにしたいんです」

吉田さん自身4人の子どもの父親である。そして、原さんもこう語る。

「やつて来た頃、ここで生き抜いている人たちの、代々受け継いでいく世界に触れて憧れました。僕にはないもの。厚みを感じました。一代だけと捉えられる。ちなみに1ターン。次の代に何を伝えようとするのか、問われている気がします。ムラを守るってどういうことなのか、模索の日々です。棚田の復元もそうした延長線にあります。ここで暮らしたいから

棚田はムラの魅力を伝える発信拠点！

復田を機に発足の「棚田を守ろう会」

「棚田を守ろう会」は平成17年、復田を機に発足。事務局の吉田創さんは話す。

「今、おそらく100人ぐらいがかかるわっててくれていると思います。先日の田植え作業に参加したのは約60人。休耕田はまだまだたくさんありますから、一枚でも多く復活させて米づくりをやっていきたいですね。僕も平成15年に1ターンで来て、田んぼが荒れたままではもったいないと棚田を守ろう会に入りました」



守ろう会は石積みの補修も行う。1ターン者もみんな地元で技術を習った

人が出でてくると言えなあと思うんですけど」かつて毎晩「ここおつたら面白いぞ」と原さんが語り続けた次男の洋平さんは、終了後、苗が余つたと、荒れていた棚田を借りて5枚復元させた。「ムラの今を生きている者の気持ちが次（未来）を決める」と原さんは語る。水が張られた美しい棚田はまさに、「ここに生きる人の気持ち」そのものだった。

松木代表はこの春、自分の家の田植え間もなく完成の研修施設。農作業体験参加者から宿泊施設の希望が出た。木材は地元提供。仲間で山から切って下ろし、専門的木材加工後、組み立ても土壁塗りも自分たちで行う

棚田が発信拠点

「そんなムラの魅力を発信する場所が、

棚田。棚田は、山村文化の象徴です」

原さんは言つ。農村で生活するには仕事は自分で創り出さねばならない。たいへんだが、それだけに魅力ある場所。だからこそ、「ここでの暮らしを自信を持つて発信することが大切」と言つ。

「例えば、田植えのときに地元のおばちゃんたちがえらいスピードで苗を植えます。街の人はびっくりする。驚きや感動がリピーターを生む。農作業体験から第2のふるさと感を持つ人や、定住したい



小阪の棚田。かつて銅の鉱山があり、宿舎がたくさん建っていたという。昭和37年に閉山以来、棚田の荒廃も進んだ

地元と都市住民が結成 「富貴・筒香田んぼつくりタイ」



*富貴集落は245戸、高齢化率約63%。筒香は55戸、同率約68%。両地区の農地はあわせて89.3haで、耕作放棄地は35.6ha（平成25年3月データ）

今や、棚田をはじめ農地の保全に外部の力は欠かせない。和歌山県内でもこうした動きは活発だ。奈良県に隣接する高野町の富貴・筒香集落*は、標高400mの山間部ながら、地元と都市住民で結成する「田んぼつくりタイ」が地域に元気を呼び込んでいる。

「富貴・筒香田んぼつくりタイ」は平成23年3月の発足以来、休耕田を復田しての米づくりやイベントも手掛けてきた。当初2年は、県「耕作放棄地再生活動協働モデル事業」を活用。平成25年からは「筒香さとやま保全会」の支援部隊として「和歌山県棚田地域保全活動支援事業」を活用し、放棄後5～8年経過した棚田の復活にも取り組んでいる。

発端は、高野町による「富貴の里元気プロジェクト」の定住スタッフとして横浜から訪れ、2年間暮らした山田亜紀子さんの思いだった。「稻刈りを体験したい！」という彼女の願いを耳にした地元耕作者西山實さん（田んぼつくりタイ事務局）が稻刈りに誘ったのがきっかけ

上：「田んぼつくりタイ」が復田した丹生川沿い田の前（上筒香）で。写真右から、山田亜紀子さん（大阪在住）、副会長のChojiさん（三重在住・シンガーソングライター）と妻の村田宏美さん、代表の久保博志さん、事務局の西山實さん

下：3年計画で復田がはじまった棚田エリア（中筒香）。川向こうにあって、全体で約4反程だが、まずは1反程度から。ここ地主たちによる「筒香さとやま保全会」も平成25年に結成

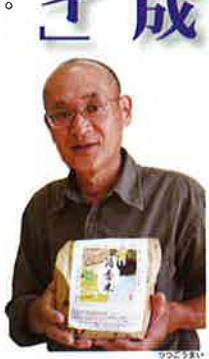
「地元はみんなほんまに人手が欲しい。作業を通してだと溶け込めやすいしな」会員も増え、若い女性や子ども連れの家族も入り、40人を超えた（地元耕作者10人含）。年会費2千円（1家族）。できたお米は地主のほか、出席作業回数に応じて会員に配布する。また、事業に頼つてばかりではいられぬと自分たちの米「筒香米」も売り出した。現在、実験的に2kg（イクヒカリ）千円で売る。パッケージも会員が考案したものだ（写真右）。

新たに賛助会員の枠も設けた。年5千円、米10kgが付く。「儲けではない。何より知つてもらいため」と西山さんが言う。もちろん、会員には格安で販売する。

「続けてもらう」とが優先なんよ。子どもも若い人もおらんから休耕地がどんどん増えることはわかっているからな」

久保会長が話すように集落の高齢化は進む。だからこそ、来てくれる人を大事にしたい。そんな思いがある。休耕田が

結ぶ縁が確実にこの地で育っていた。



事務局の西山さんと筒香米

海南市海老谷

棚田オーナー制度に取り組み11年

全国で棚田保全活動がはじまり、まつて以来、その中心に「棚田オーナー制度」は据えられてきた。これは、都市住民が一定の料金を払い、棚田での田植えや稲刈りなど農作業に参加し、保全とともに地元との交流を深め活性化を図るものだ。

平成4年に高知県梼原町ではじまり、今では鹿児島から秋田まで日本全国に展開している。その数は80カ所以上＊。そして和歌山県では、海南市海老谷集落が平成15年に開始し、10年以上が経過した。「行政の勧めもあってはじめたわな。地元のメンバーは20人おるけど10年前と同じ。平均年齢もそのまま10歳上がって、だんだんたいへんになってきたな」地元海老谷集落の代表を務める峯本稔さんが本音を隠すことなく話す。

「多い年は30組あった。オーナーさん全部で約150人。人がわいてもうて、たいへんやつた。今は8組。1組8人と上限決めてるけど、10人以上来たりするなあ。8組で50～60人になる。中には8年継続の人いるよ。でも、年3～4回の作業ではな、住んでもらつて草刈りとかもやってもらつんが一番やなあ。

地元はオーナーさんが来るゆうたらみんな手伝いに出る。自分ところの田んぼやつなくてよ。高齢になつてきて作業中にケガする者も出てくる。足腰弱くなつてからな。こうしたことでも心配よ」オーナーの参加費は年間3万円。玄米40kgの保証付き。8組のみでは、農地保全の資金源にさえ、むずかしい。



1：海南市の南東部にある海老谷集落は31戸。海南駅からは車で25分程度。そびえる山々が大きくうねるように連なる。その斜面を利用し、かつては棚田が多く拓かれ、今は多くの多くが柿・みかん畑に変わった

2：アオガエルの卵をすくう峯本稔さん



だが、訪れる子どもたちにとって、海老谷の棚田は生きものの宝庫だ。網や虫かご、水槽を持ってやってくる。当然、田植えはそつちのけである。子どもたちが好きだというアカハラフモリに、アオガエル、ドジョウ、サワガニ……水生昆虫もここではたくさん出会える。

田植え目前の田んぼにアオガエルが卵をびっしり産み付けていた。小さなオタマジャクシも泳いでいる。峯本さんが慣れた手つきで卵をすくつて言う。

「海老谷には生き物のが多い」ゆうて、ここでの棚田に来るオーナーさんもいる。素晴らしい学びの場でもあるのだ。今まで保ち続けたこの価値を守っていくためにも「棚田オーナー制度」は、地元農家頼みでなく、みんなで支える継続可能な新しい枠組みが必要となつてている。

*棚田オーナー制度の実施数は、水土里ネットHPに70カ所が掲載。そのほかでも実施されている

取材・文：石井里津子

「なんとかしようら、わがらでしようら」

沼谷区長 中植 正富



*沼谷地区25戸47名で取り組む。集落内の農地面積は10ha

沼谷をどうしたら活性化していくかということで、私たちは「なんとかしようら」で、わがわいでしようら」を柱に行動を起こしました。元気な沼谷区を目指し、沼谷ブランドを育てる取り組みをはじめました*。

「沢ワサビの栽培」「畑ワサビの栽培」「松茸山の整備」「カウゾの栽培」を中心にはじめました。沢ワサビの栽培は耕作を放棄した沢の畑を借りて作り、平成23年の台風で畑に入れた砂が全て流れました。

- 1 : 沢ワサビ畠のようす
- 2 : 神社の参道に竹筒に入ったロウソクを並べる
- 3 : 夜は神祕的な空間



たれてしましましたが再度、砂を入れ作ることができ、今では立派に育っています。次に畑ワサビの栽培です。12haの休耕田を借り、耕耘と日除け防止用の骨組みと鳥獣害防止用柵を設置し、ワサビの苗約4000本を植え付けました。畑ワサビは葉をワサビ寿司用に、地下茎の方は加工用ワサビとして販売する予定です。また、ワサビ寿司作りを都会の人や小学生の子供たちに体験してもらえたうど思っています。

次は松茸山の整備。これは松茸狩りの好きな人が集まり、松茸生産組合を組織して松茸の管理栽培を行い、収穫販売をするものです。

次に和紙の原料の「カウゾ」の栽培です。耕作放棄された田を借りて栽培し、保田和紙の原料として「カウゾ」を販売します。

これらの作業は、和歌山大学の援農サークル「アグリコ」の人たちに手伝って頂いています。

沼谷区のイベントについては、昔やつていたけれども忘れられてしまった行事を復活しようとお花見会、故郷夏祭りをはじめました。故郷夏祭りは、お宮を中心沿道に約600本のロウソクを立て幻想的な世界を味わってもらえたうど思いで取り組んでいます。

一連の取り組みがテレビでも紹介され、それを見た都市住民が、一ターンで定住するようになつたり、週末農業を行つたりと沼谷とかかわってくれるようになつたことは、明るい希望としてたいへんあります。



和歌山大学生と地元のコラボレーション

和歌山大学観光学部 准教授 大浦 由美



和歌山大学観光学部の学生たと最初に沼の棚田を訪れたのは、平成23年7月のことだった。胸に届くほどの草叢に覆い尽くされた休耕田で、初めて扱う刈払機や熊手を手に格闘する」とのグループを「棚田ふあむ」*と名付けた。少しでも多くの耕作放棄地が農地(farm)として再生するように、そして沼の棚田を家族(fam=family)のように見守つていただきたいという思いが込められている。

地元側の受け入れ組織である「沼の農業をまわる会」をはじめ、和歌山県庁や有田川町の全面的な支援の下、まずはソバの栽培から着手した。1年目はほとんど農作業が中心であったが、「ソバ打ち交流会」の開催をきっかけに地元の皆さんとの交流も始まった。2年目からはソバの他に「溝(水路)」の現地見学など棚田を知る活動を取り入れた。また、10月の白山神社秋祭りでは、奉納する餅の「担ぎ手」を学生たちが務め、約50年間

途絶えていた急斜面の参道からの餅奉納の復活を果たした。そして3年目の今春からは復田と稻作にも挑戦している。学生たちの声を聞くと、農作業以上に発展させたいという気持ちが強い。最近では先輩を中心に学内での学習会を企画し、これから活動の方向性を自分たちでも考えていくという新しい動きで盛り上がっています。

この2年間の活動が、棚田保全活動として直接的に寄与できたことはわずかだが、農山村の抱える問題を「他人事」ではなく「自分事」として捉え、意欲的に活動しようとするとする学生集団が育ってきたこと、また、学生との交流の場が近年減りつつあった地元の皆さん同士の交流の場ともなり、楽しみにしていただいていることは成果といえるだろう。「棚田ふあむ」と名付けた初心を忘れず、その思いを後輩にも引き継ぎ、息の長い活動として育てようと奮闘している学生たちのパワーをうまく地元の発展につなげていきたい。



- 1 : 平成25年5月19日の田植え。学生たちも地元も雨の中、奮闘
- 2 : 棚田ふあむのTシャツも作成!みんなでパチリ
- 3 : 平成24年10月の秋祭りにて、餅を担ぐ学生と大浦准教授(右)

ミツバチと共に生する紀州の段々畑



5月中旬、有田川町吉備で咲き誇るみかんの花。「温州みかんは単為結果で受粉の必要がないのに蜜を出す植物」と山崎さんに教わった



巣箱は木で囲まれた場所に設置。ミツバチは3~4kmは飛ぶが、遠い採蜜場を選ぶと採蜜回数が減るため、近隣を選んでいるだろうという。ある場所を選ぶとそこで集中的に採る習性ゆえ、蜜源の異なるはちみつができる



1つの巣箱の中に巣板は18枚入っており、一箱に3万6000匹のミツバチがいる計算となる



山崎貞夫さんはみかん蜜と山の蜜を探る養蜂家。「山の蜜の蜜源は定かではないが、トベラにサンショウウ、ハゼノキやモチノキ、ウノハナかなな」だと話す。また、女王バチになるか否かは幼虫初期の栄養状態に因るとか。卵から孵化して3日間はどのハチもロイヤルゼリーで育つがその後、はちみつで育つ雌バチは働きバチに。ロイヤルゼリーで育つと女王バチに

みかん畑が支える全国第4位のはちみつ王国

和歌山県は、知る人ぞ知るはちみつ王国である。その生産量は、なんと全国第4位！（平成22年農林水産省データ）そして、ミツバチの蜂群数は全国第3位（平成23年）。

その高い生産量を支えているのが、実はみかん畑なのだ。和歌山県畜産課によると「県内の蜜源は柑橘類で主にみかん。さらにレンゲや山野の広葉樹など」という。この蜜源植物によって、はちみつは味や色、香りが異なる。和歌山県には蜜源として最適なみかん畑が広がっているゆえに、高品質のみかん蜜が採れるというわけだ。

また、ミツバチはイチゴなど果実の受粉にも貢献する。特に和歌山県では紀州南高梅の受粉に活躍しているが、ウメの花は2月。残念ながらミツバチの採蜜の活動期とは重なっていない。

ミツバチ1匹が一生分集めて、たった3g

5月、みかんの花の香りがほんのり地域全体を覆いはじめると養蜂業を営む者は忙しくなる。ミツバチが最も盛んに蜜を集める季節に咲く花、それがみかんの花である。

みかん農家で、養蜂も行う山崎貞夫さんに現場を見せてもらった。連なるみかん畑の奥のそのまま奥に巣箱が並ぶ。ミツバチが飛び交う中、巣箱から巣板を1枚取り出してもらうと、両面にミツバチがびっしり。1匹の女王バチを中心に、1枚に2000匹以上いるという。

「ミツバチには『社会の胃（ミツ胃）』があって、そこに蜜を入れて巣に持ち帰る。口移しで日齢の若いハチに与えて残りを巣房に蓄える。口の中の酵素で花の蜜がはちみつに変わる。彼女たちが春から夏に蜜を集めるのは1年分の食料なんです。それを人が横取りしているわけ。だから、もらった代わりに冬は、砂糖水をやるんですよ。

ミツバチの命の長さはトータルの運動量で決まるらしいですね。5~6月といった蜜の最盛期には羽化して1週間か10日程度。でも、秋や冬は数ヶ月も生きてますよ」

ミツバチ1匹の1日に可能な採蜜量は0.3gとされる。10日働いて3g。ティースプーン1杯は10gだから実に希少だ。そんな貴重なはちみつを人が拝借はじめた歴史は古い。世界史の中では8千年前ともいうが、日本では9世紀に宮中へ各地から蜜が献上された記録がある。山崎さんが思わず情報をくれた。

「日本の養蜂業発祥の地は和歌山県有田市ですよ。明治のはじめ、博覧会で受賞したり、（内務省命で研究のため）天秤棒で巣箱を担ぎ、歩いて東京に持っていたと聞くね」

紀州・和歌山に「蜜市翁」あり！

江戸から明治にかけて在来種のニホンミツバチを数百群飼育し、日本の養蜂業を確立させた人物がいた。「蜜市翁」と呼ばれたその男、有田市宮原の貞市右衛門（1825~1904 現かつらぎ町花園生）である。15歳で巣箱1箱を入手し養蜂技術を追求し極めていった。

江戸時代の巣箱（巣箱）は樽や桶を利用したものだったが、市右衛門は独自の規格を作り上げた。また、移動養蜂を開発。3~4月はレンゲ等を求めて和歌山市周辺へ向かい、みかんの花が咲く5月に有田地方へ移動させた。夏は山の花を求めて移った。移動は、夕方ミツバチが落ち着くのを待って箱を固く縛り、天秤棒で担いで夜道を歩き通し朝までに運んだという。

さらに、分蜂時の捕獲方法も確立させたほか、蜜蝋の製造でも高く評価されている。晩年はみかん栽培も広く手掛け、農家の副業としての養蜂を定着させていった人物だった。

セイヨウミツバチ導入後も、こうした蜜市翁の創意工夫は日本の養蜂業の基礎となった。みかん畑と紀州人の情熱が生んだ、もう一つの物語である。

みかん蜜は透明で色が薄いのが特徴。酸味もあり香りも良い。山の蜜より値が付く



紀州・段々畑の風景の奥に生きた地域遺産を見る

段々畑は、常にその生産力を上げんと先人の優れた技術や労力が投じられてきた。そして現在に至るまで、ほ場整備やかんがい技術によって変貌を遂げながら生産の現場であり続けてきた。そんな段々畑でも荒廃が懸念される今、私たち段々畑の風景の奥に何を見ることができるだろうか。御坊市名田と有田川町吉備の2カ所へ伺つた。

昭和55年頃の名田地区の様子(水土里ネット名田周辺提供)。かつて、段々畑ではサツマイモ、除虫菊、ケシ、サトウキビ、葉たばこ、養蚕が行われてきた。中には「どのじらす」という通称の段々畑もあり、開拓の時期を推測もさせるが、多くは明治や大正、昭和にかけて山を開拓していったのだろうとのことだった



石垣は割石が多いようだったが、ツラはまっすぐそろい、組んだ人の美意識の高さを感じられる

仮家さんが今もサヤエンドウが栽培され収穫済みの石垣の段々畑へ案内してくれた

「僕ははじめてこの地区に来たとき、石垣が広がる光景に感動したんです」と坊事務局長

丘陵地に波打つように並んでいる。ここは、御坊市名田地区。ハウス群の風景が繰り返し繰り返し目に飛び込む。ハウスでは主にスター・チスやカスミソウなどの花き類が栽培されている。だが、かつてこの辺りは見事な石垣の段々畑が覆い尽くしていたという。

今もわずかにハウスの合間を縫うように石垣が残る。その石垣は、四角く垂直に組まれ巨大な雑壇のようでもあり、何か遺跡のようにも見えた。

「ここは海岸段丘の畑地帯。南西向きで日当たりも良く、霜もない。ただ、大きな川がないために水がなく土地は乾燥し、サツマイモや麦、除虫菊など零細農業でやってきたんです。それが、昭和41年に日高川から取水する『県営名田周辺畑地かんがい事業』が完了し、かんがい農業へと変わったんです。第1段階として既存のほ場のままスプリンクラーを入れ、スイカ栽培などが入ってきましたが、その後、ほ場整備も進み、パイプハウスの施設園芸へと変わってきました。

さらに「経営構造対策事業」で鉄骨温室が導入され、花き類が盛んになりました。水が来たおかげでここは農業所得も上がり、農業後継者も多い地域なんです」

「石垣はかつて、面積を確保するために造りました。とくに戦後、サヤエンドウの普及員OBとして名田地区農業事情をよく知る仮家正弘さんが解説してくれた。水土里ネット名田周辺の組合員で、農業普及員OBとして名田地区農業事情をよく知る仮家正弘さんが解説してくれた。

「石垣はかつて、面積を確保するため

整備の隙間に残った石垣——御坊市名田

ごぼうしなだ

ドウの产地となり、石垣にすると3倍取れるとみんながこそつて石垣を増やしました。石垣を階段状に組むことで、冬期は輻射熱で畑の温度が上がり良質ものが取れた。こうしてサヤエンドウ日本一の产地となつたわけです。石垣にはそこから出た石を利用したり、海の石を拾ってきて組んだり、石山を爆発させて石を切り出したりもしました」

水土里ネット名田周辺事務局長、坊芳文さんも言つ。

「基盤整備されたその隙間に今も石垣が残っていますが、細かい石を緻密に組んだ石垣で、草一本でガタつくんです。もう組める人はなくて、災害でも復旧のやりようがないんですよ。

業者に依頼してコンクリートで固めているのが現状です。こうした畑の荒廃は進んでいます。けれども、石垣の風景はこの地域の原点だと思います。けれども、石垣の風景はこの地域の原点だと思いますね」

仮家さんは言つ。

「今、農家は経営の合理化を考え、設備投資に力を入れている状況ですから、そのかたわらこうした文化遺産を守っていくのはむずかしいでしようね。ただ、農地をみんなで造ってきた地域です。石垣の苦労話などを伝えていく必要はあると思いますね」



もととは漁業と農業の兼業の地域。10月1、2日の秋祭りは学校をはじめ、地域全体が休みに。そんな農村文化が色濃く残る。「祭りの日が一番、水を使わない。盆正月よりも。働き者の地域です」と坊さん



丸い石垣の石は有田川から持って上がったもの。「下に一段掘って根石を3つ置いた後、斜交いに2つ置いて、こけないように上に組んでいく」とのこと。「四つ目をこしらえるな(正面から見て2方向の目地が十字かX字にならなければいけない)」というのが昔からの掻。少しでも上の面積が広くなるよう、そらせながら組んでいく。レンガ積みもするが、斜交いに組むのが多かったとか。石垣の修理は1~3月の仕事

昭和初期の出荷は木箱。これは木箱に貼っていた昭和期のラベル



「オオコ」(=天秤棒)にシロでできたもっこをつけ担ぐ則村さん。則村さんはくるっと肩で140cm程度もあるオオコを回し、右肩から左肩へ担ぎ変えた。早業!こうした体得した所作の文化も引き継がなくなる

則村さんは、みかんの1万本に一枝という優良な枝がわりを他の種と交配し、約20年かけて確定させた「ニュー則村」という新しい品種の開発者



吉備大谷地区のみかん畑。かつては畑にススキ、コウジ、カヤといった山草を刈り、土が流れないよう横向きで置いていった。束にした山草にヤマオコ(2m以上の長さがあるオオコ)を刺して担いで運んだという

上は現場で割った石を組んだ石垣。下は今も使用される索道。みかんを運ぶ手段も、人力で担ぐ→索道→モノラックへと移行
(写真協力: 和歌山県有田振興局)

これは「タテ」。タテにみかんを入れてオオコで担いで運んだ。大きいタテ2つに入る量は8貫(1貫=7.75kg)で55~60kgを担いでいたことになる
重い荷を担ぎ、急な斜面で働くには腰が曲がっている人(年配者)が多いと話す生駒さん

圧倒的なスケールで展開する有田地方のみかん畑。「有田みかん」の産地である有田川下流沿岸の山腹は、急斜面にもかかわらず、高い山の上までみかん畑が開園されている。2000haを超えるみかん畑が連绵と地域一帯の山々に造られているのだ。

だが、一大産地としての価値は周知されながらも、そこで組まれている石垣をはじめとした文化的価値には光があたつてこなかつた。

有田川町吉備のみかん畑に近づくと、見事な石垣の世界がある。角が取れた丸い石で組んである石垣も多い。吉備田口地区の生駒友二さん(S4生)、大谷地区的則村昌昭さん(S11生)に話を聞いた。2人ともみかん畑とともに歩んだ人生である。生駒さんが言う。

「現場で割った石で組んだものが多いやろうけど、有田川の石がたいそうたくさんの山の上に上がります。朝夕、みんなもっこを天秤棒につけて、前に2つ後に2つ合計4つの石を山の上に持つて上げって積んだんだよ」

有田川の石は硬く、丸くて積みにくいが、壊れにくいという。石を積む作業は「明治末期や大正初め生まれの人たちまでだった」というが、則村さんは、石を運んだ経験を持つ。

「僕らもにのうて(担いで)上がったよ。父が崩れたところを組んでくれるからそこへね。もっこで担いで持つて上がったね。狭いきつい坂があつて『地獄坂』やつんよ。『すね噛む』くらい骨折った

【階段状に石垣を組んだら排水が良くなる】

日々の前に広がる段々畑は、地域の歴史が刻まれた、生きた地域遺産だった。先人の労苦を刻んだ石垣は、その象徴的存在といえるかもしれない。

段々畑の風景の奥にあるのは、ここで生き抜かんとした地域の原点である。石を積むには積む理由があり、それを成せる高度な技術があり、それによつて次段々畑地域の根幹にあるのだ。

これを今の時代に失わず、次世代へつなぐことが地域の自信や連携につながり、活性化の原動力になってくれるのではないだろうか。

地域の記憶を刻む石垣、道具、人……有田川町吉備

なつて、ええみかんができる。だから石垣にできるところは石垣にした。その代わり排水が良いもんだから、雨がないと難儀したんや。ちょうどみかんが大きくなる盛りの8~10月に雨が降らないと、昔の風習で『ひあげ』ゆうて、山の一番高いところで火を燃やした。雨乞いよ。

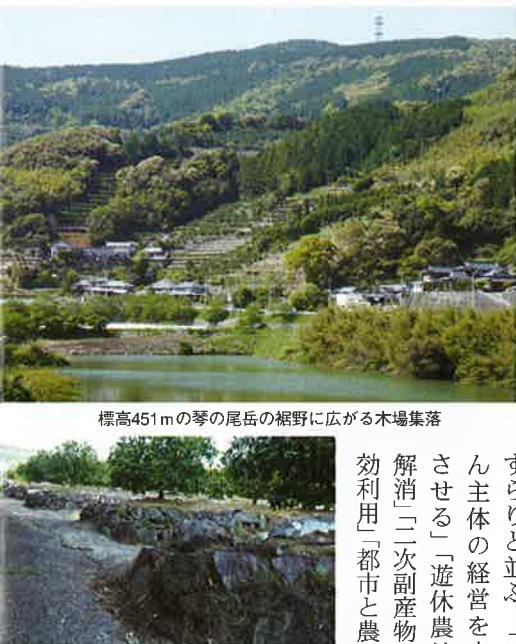
ここから約80km歩いて高野山奥の院の火を提灯に入れてもらつてきた。明治何年かの大干ばつでは、ぞうりやわらじを湿して歩かんと地面が乾いていてすぐしあ水で湿らせる場所がなかつたと聞かされたものや。昭和37年が最後の『ひあげ』だった。昭和39年に眞宮畠地かんがい事業が入つて、タンクができると有田川の水が上へ揚かるようになつたからな

地域の歴史を知るお一人が苦勞話の一
片を教えてくれた。

段々畑は生きた地域遺産

昭和初期の出荷は木箱。これは木箱に貼っていた昭和期のラベル

段々畑を生かす—全国の取り組みから—



標高451mの琴の尾岳の裾野に広がる木場集落



園内はスピード・スプレーヤーが入るよう手直しが進む

平成7年の全国棚田(千枚田)連絡協議会発足以来、棚田保全の気運は全国的に高まつていった。また段々畑の地域でも、段々畑を生かし、地域活性化が推し進められてきた。全国で先駆的な2例、長崎県長与町木場集落と愛媛県宇和島市遊子水荷浦の取り組みを紹介する。

ながよちょうこば

長崎県長与町木場集落

「ながさき型集落営農」に取り組むみかん畑地帯

長崎県長与町木場集落の活性化の発端は、平成8~16年に入った「県営畠地帯総合事業」(畠地かんがい63ha、受益者38戸)だった。

だが、完成を間近にし、みかんの努力ではどうすることもできなかつっていた。もはや個々の農家の努力ではどうすることもできなかつっていた。「夢の郷長与木場」

「賦課金を返せるか心配ですね。県普及センターの協力を仰いで平成16年から2年間、集落活性化事業を入れました。みんなで10年後のビジョンを話し合つてね。その結果がこれです」

きれいな色つきイラストのビジュアル画が差し出された。夢がずらりと並ぶ。「みかん主体の経営を充実させる」「遊休農地の解消」「二次副産物の有効利用」「都市と農村の

交流」など。これらすべてに具体的な対策案が記されている。

ちょうどその頃、長崎県は「ながさき型集落営農」※を推進していた。木場集落は自分たちで作成した「集落ビジョン」を実現するために、「ながさき型集落営農」に取り組もうと合意する。

平成18年、モデル地区に指定。そして平成19年、県独自の集落営農組織である農用地利用改善団体「夢の郷長与木場」(平成25年度会員数47名)が設立された。

「夢を持つとかんば先に進まん。実現するのが夢」。そんな思いを名前に決めた。

自分たちの「夢」——農地の貸し借り斡旋、労力補完システムの構築、遊休農地解消、高品質柑橘生産技術の導入等を「夢の郷」の活動内容に掲げ、一つ一つ実現してきた。

独自の「労力補完システム等を構築

「労力補完システムが必要でした。いわば「結」。みかん農家は個別経営でしょう。互いに手伝い合う習慣がないから『手伝つて欲しい』と言えない。だから、ポイント制で労力を補える独自の仕組みを作りました」

併せて園内を手直しすれば、防除用のS・S(スピード・スプレーヤー)も通行可能となる。当初は、不慣れな共同利用へ反対もあったが、今では格納庫も建設された。さらに「耕作放棄地バスターZ活動」では農地復旧(103a)や農地賃貸で新しい手への集積のほか、市民農園の開設も実現した。遊休農地を写真に収め、それを集落で回覧してもらい理解を得てきた。

「今後は加工所を設けたいですね。野菜の加工や柑橘類をジャムにしたりね。高齢化はますます進みますでしょう。共同で楽しくできることが大事。耕作放棄地対策も草刈りだけでなく、手入れが楽なクリヤ加工用にイ

チックを植えましたよ。将来は観光農園も考えています」

平成20年9月、木場集落は「長崎県のだんだん畠十選」に認定された。「中山間地域の畠作地帯にも目を向け、誇りを持つてもいい、活性化への取り組みの契機にしてほしい」というねらいからだ。認定地区への活性化支援の仕組みも県は設けた。

県を代表する段々畠地帯と認められた木場集落、「夢」を明確にし、一つずつ実現していく中で美しい段々畠が保たれ、次世代に光が射しはじめた。行政とともに、その支援をうまく取り入れ、地元にあつた独自の取り組みを考案するという創意工夫があつてのことだ。この地で根を張り、地域の人をもよく知るからこそ開けた道である。

※「ながさき型集落営農」

「集落営農」といえば、一般に経営の一元化や組織の法人化だが、長崎県は独自の集落営農を考え、個別経営は維持しながら地域と農地を守っていくやかな組織の必要性を説き、集落の3分の2以上で結成する「農用地利用改善団体」の推進を図った



木場集落。長与町は長崎市街地より北へ約10km。人口約4万3千人。木場集落は町の北東部にある中山間地域。総世帯数62戸のうち農家は38戸。写真提供:長与町



「だんだん畠十選」の認定(12ヵ所)は「第14回全国棚田サミット(長崎市・雲仙市)」がきっかけ。景観、農業生産、地域文化の継承、農業土木技術の歴史、生態系の保持など多方面で評価



「今62歳だが、65になったら定年して後継者に譲る」と言う山口謙二さん。世代交代を念頭に置く

明日へ



段畑では早堀馬鈴薯が栽培(4.5haで15.6トン)される。収穫後は自家消費用にサツマイモ、タマネギなど。土が流れないよう畑にはかつてはサツマイモの蔓が横に敷かれたが、今はロープが利用されていた。



遊子水荷浦は宇和島市西端部、三浦半島に位置する。現在、地主26戸中22戸が主に耕作。そのうち水荷浦の人は11戸で隣の集落から耕作に。平均2反程度



1 : 「普通は周りに小石を積めるが、小石がないため土を詰める。砂地みたいなもんだから、雨が降ると崩れてしまう」。山下会長も砂垣積みの修得に10年以上かかったという
2 : 68歳の山下会長。会の平均年齢は70歳。最も高齢で84歳、若い人は50歳代
3 : 「だんだん茶屋」(右)と直売所(左)「早堀馬鈴薯」5kg1600円。焼酎「段畑」720ml 1500円で販売。応援Tシャツや海産物も。馬鈴薯は果物のように透明感がありジューシーでシャリっとした食感だった



ゆすみずがうら 愛媛県宇和島市遊子水荷浦

国的重要文化的景観の全国3例目として、平成19年7月に選定された愛媛県宇和島市遊子水荷浦の段畑。この地では段々畑を「段畑」と呼ぶ。まさに「耕して天に至る」光景が広がる。近づけば天へ天へと石垣と乾いた土が繰り返され、まるでピラミッドのようにそびえていた。

山という山が頂上まで段畑という脅威の風景は、かつては南予の瀬戸内海沿い一帯にあった。その風景が奇跡的に残った場所。それが遊子水荷浦である。

なぜ、ここだけ残ったのか。憲穂さんが話す。

「段畑を守ろう会」会長の山下憲穂さんは話す。

「ここは地が浅くて、周りの段畑がみかん畑に変わつても、幸運がみかん畑になつたところは今は荒れてしまつた」

「昔から『タダで上がるな』と爺に言われた地域。石一つでも藁でも何でもええ、持つて上がれど。肥えだこ一つ抱ぐのがたいへんな苦労でしたから」

生きるため山を 開墾し続けた

水荷浦は江戸時代にイワシの漁場として発展し、平地がないため、自給用に山の開墾が進んだ。米はなく麦。明治以降は桑畑になつた。山の頂上まで畑に

なると、あとは石垣を組み、耕地を広げた。「大正の初めから昭和はお蚕さんで儲けた分、農地に投資できた。その後返しで拡張した」と山下さんは言う。

昭和に入り養蚕は低迷する。国策でサツマイモ畑に変わつた。戦後はイワシも不漁となり、高値の付くジャガイモに移つた。

さらに昭和30年代にはみかん畑へと変貌を遂げ、海も真珠や鯛・ハマチの養殖業へ移行していく。その後、急激に段畑は荒廃していったのである。

そして平成に入り、水荷浦の段畑もわずか2ha弱となつた時、「段畑を守らないかん」と地元で声が挙がつた。平成12年「段畑を守ろう会」が地元耕作者と賛同者の14人で発足した。

「守ろう会」が担う保全の道

平成12年と14年、「市町村緊急地域雇用対策事業」を利用し、また平成23年には「農山漁村活性化プロジェクト」で雑木林化していく段畑が復旧され、4.5haとなつた。そんな段畑に年間2万4~5千人が訪れる。平成15年からはじめた4月開催の「だんだん祭り」は早堀馬鈴薯の即売会でもあり、多い年で5千人で賑わつてきた。晩夏の夜は段畑にぎらりと並べたろうそくに明かりを灯す。

平成20年からは、オーナー制度も実施(平成25年度26組)。

「ほんまは植える作業もしてほ

保全を誰がどう考え 次へつなぐのか

人がこの地で生きんと闘つた軌跡を現代の中に生かす道を模索し続ける地元の姿があつた。先人が残した農業土木技術に文化的価値を見い出した今、農地の保全を誰がどう考えへつなぐのか。地元だけではなく、行政や外部と共に歩む次のステップに移行する時が来ているようだつた。

り、多い年で5千人で賑わつてきた。晩夏の夜は段畑にぎらりと並べたろうそくに明かりを灯す。

「ほんまは植える作業もしてほ

しいけど、4月の収穫のみで芋

国的重要文化的景観となつた段々畑

掘りに来る程度

さらに、平成21年には段畑の下に「守ろう会」運営のレストラン「だんだん茶屋」ができた。

地場産の「鯛のびちびち丼」など地元の料理が人気だ。だが、経営は厳しい。「補助が切れたら赤字になつた」と苦笑する。

平成19年に「段畑を守ろう会」はNPO法人を取得。支援も得られやすくなつた。また、JAが早堀馬鈴薯を一括定額で買い取つてくれるようになつた。

だが、これで保全環境が整つたわけではない。

水荷浦の段畑の変遷が物語るよう、経済的に成り立たない段々畑は存続してこなかつた。

「ここは名前ばかり有名になつて管理が追いつかん。会で年3~4回草取りをするが、石垣の修理もあつて管理しきらん。将来は段畑だけでなく、海の方に筏を作つて、釣り体験もセットにしたいが、なかなか……」

和歌山県の地域元気情報

県内には地域の活性化に取り組む地区は、まだまだたくさん。その中から6カ所をご紹介します。

お母ちゃんたちの「軽トラ市」が大人気！

かいなん えびだに 海南市海老谷地区

毎月第2日曜日、JR海南駅前に地元農家が出店する「軽トラ市」(企画：海南市)にご注目あれ！ その一番人気が、海老谷地区のお母ちゃんたちによる軽トラックだ。50～70歳代の海老谷のお母ちゃんたち約10人が、自分で作った野菜をはじめ、タケノコの水煮や佃煮、かき餅など加工品を販売する。朝9時にオープンすると、瞬く間に売り切れ続出。魅力ある商品にお母ちゃんたちの元気が相まって人を呼ぶ。平成24年にスタートし、お母ちゃんたちの元気は留まるところを知らず、「タケノコ山椒佃煮」や「地元小麦と生姜のラスク」といった独自のアイデア商品も練る。「来月もがんばって、たくさん出品したい」と意気込んでいる。



学生と地域の交流から生まれた“あんぽ柿”新パッケージ！

紀の川市林ヶ峯地区



紀の川市林ヶ峯地区は、柿の生産が盛んなところ。柿を乾燥させた“あんぽ柿”が有名だ。和歌山大学農業農村交流サークルagrico.(アグリコ)は、平成21年からここで活動を開始した。農業ボランティア活動とともに地域の祭りなどにも参加し、地元との交流を深めてきた。1年を通して柿の作業(摘蕾、摘果、収穫など)や、林ヶ峯農産加工グループ「長寿の郷」の皆さんと“あんぽ柿”的加工なども行っている。そして、この交流から生まれたのが、新たなる“あんぽ柿”的パッケージ。agrico.がデザインを担当した。今、新規販売先など検討中だ。(和歌山大学agrico.部長 堀千海記)



江戸期の特産「畑ゴンボ」復活！

橋本市西畠地区

橋本市西畠地区からは、めずらしいゴボウの栽培を紹介する。発端は、平成18年に当時の自治区長を中心に、地域づくり活動団体「プロムナード国城」を作ったこと。「畑ゴンボ」と呼ばれるそのゴボウは、江戸時代から戦後

まで西畠地区の山の斜面で栽培されていたものだ。通常のゴボウより太く、味、香り、食感も良く、また他の素材も引き立てると重宝されていた。地区内外から人が集まり、地元のお年寄りから指導を受けての復活だった。現在「くにぎ広場・農産物直売交流施設組合」が畑ゴンボ栽培活動を引き継ぎ、直売所運営も計画中。平成25年からは和歌山県の制度を活用し、井関農機から継続的な支援(機械とオペレーターの提供等)を受け、活気づいている。

県HP : <http://www.pref.wakayama.gv.jp/prefg/130300/50/52/210330aguri.html>

仲良し地区のほんわか直売所へようこそ！

御坊市森岡地区

平成24年5月にオープンした「マルシェ森岡」。御坊市塩屋町南塩屋、森岡地区の人々が栽培した野菜など農作物を持ち寄っての直売所だ。月1回第2日曜日のみの開店である。主たる目的は、野菜等の販売というより、地区的コミュニケーションを図るために集まれる場所をつくること。活動は賛同した地区の有志によるものだ。栽培、収穫、値段付け、販売、会計、販売所の整備まで全て自営。直売所をきっかけに、コミュニケーションはより一層深まってきた。地域外

からも固定客ができ、リピーターも増えた。今後は、加工食品も手掛けていく予定。ぜひとも来ていただき、仲の良い森岡地区の雰囲気を楽しんでもらいたい。



「北の直売所」祝開設5周年！！

有田川町北地区

「北の直売所」開設のきっかけは和歌山県が行った地域おこしのワークショップ。補助金をまったくもらわずに、改造した小振りの貨物コンテナを置いていただけのものでスタートした。土日祝のみの営業だが、大阪へ抜ける道路脇にあって賑わっており、平成24年には町の支援で立派な屋根も完成した。



地区住民が交代で行う店番はボランティア。薄れつつあった地区内のつながり強化にも役立っている。平成25年で開設5周年。ますます元気に営業中だ。地元の農作物や農家自家製の金山寺味噌などが好評である。

人も芋も掘り起こし、地域の活力に！

田辺市龍神村

面積の94%が山林の龍神村。日高川に沿った狭い谷あいで水稻を中心に梅、柚子等の果樹、ピーマン、里芋等が栽培されている。味が濃く美味しい龍神村産の里芋を「龍神のサトイモ」としてブランド化しようと、平成20年、地元有志を中心に行なった「みらい龍神」を結成。従来の販売と併せて、今まで捨てていた親芋を利用した焼酎の生産販売に取り組んだ。スタートした平成22年度は600kgの親芋を収穫、原酒(アルコール度数35度)100本と25度917本が完成し即日完売。平成25年度は3トンの親芋と荒廃農地を復旧して作った親芋から約5000本の焼酎が完成。廃棄物の活用ゆえ生産者にも好評だ。今後は里芋の加工、焼酎から作る里芋酢の開発とともに、県内外のイベントに積極的に出店し、全国認知を目指し会員の力を集結し取り組んでいきたい。

(みらい龍神代表・富田進記) 龍神村商工会HP : <http://www2.w-shokokai.or.jp/ruijin/>